● ビブリオテーカ ●

BIBLIOTHECA

Nihon University Mishima Campus

日本大学国際関係学部・短期大学部（三島校舎）

No.12
2016.10

ペルーの貧困研究を導いてくれた1冊の本

国際関係学部 国際総合政策学科
教授　福井 千鶴

1996年12月、ペルーの首都・リマの日本大使公邸で恒例の天皇誕生日祝賀レセプションが行われている最中、テロリストがレセプション会場に乱入し、公邸を占拠した在ペルー日本大使公邸人質事件のことを覚えている方は少ないかもしれない。その時、トゥパク・アマル革命運動（MRTA）の左翼ゲリラで構成されたテロリストたちによって、多くのペルー政府要人や軍人、日本大使館員や日本企業のペルー駐在員が人質となった。翌1997年4月にペルー警察の突入によって事件が解決するまで、人質は4ヶ月間拘束された。こうしたテロがペルーで起こる第一の理由を一言で言えばそれは極端な貧富の格差にある。

当時アンデス山岳地帯の耕作限界地域に多くの極貧農民（1日1ドル以下で生活）が居住していた。1970年代に入ってから、これら農村部の貧困問題が深刻化し、農業失業者がリマ・カヤオ首都圏などの都市へ職を求めて移住した結果、都市部への移住者の人口が急激に増大し、都市部の貧困問題がペルーの重要な課題となった。

都市部における工業やサービスなどの合法的産業には、農村地域からの移住者の労働力を吸収する余力がなかったため、移住者は非合法的な生活を余儀なくされ、結果として、プエブロス・ホーベネス（Pueblos Jóvenes）と呼ばれる都市部スラム居住区に生活する貧困層住民が激増したのである。

都市の中心部は立売りなどの非正規の商活動をする貧困層住民で溢れ、これらの人々が、行政の及ばないところで営む経済活動、いわゆるインフォーマル・セクターを形成することとなり、その結果、ペルーは都市部と農村部の双方に貧困層を抱えるという深刻な状態に陥ったのである。

▲ リマ市内にあるプエブロス・ホーベネス
荒涼とした砂地が続く海岸砂漠地帯に水道施設はなく、飲料水はもっぱら給水車に頼っている。

こうしたペルー社会の貧困層の実情をどのように分析すべきかを考えあぐねていた2001年、私の十数年来の旧知、そして恩師である、リマ市サンアントニオデパドゥア教会（カナダの聖フランシスコ会所属）のマヌエル・加藤神父より1冊の本が私の元へ送られてきた。それはペルーの代表的なエコノミストで、初期のフジモリ政権の大統領経済顧問も務めたエルナンド・デ・ソト（Hernando de Soto）氏の書いたEl Misterio del Capital（『資本の謎』）という、何ともミステリアスな題名の本であった。

▲ マヌエル・加藤神父

この本はペルー社会を批判的に分析したもので、当時ペルー本国では発売禁止となっていた。送られてきた本は海賊版だったが、私の研究にとっては、かけがいのない貴重な資料との出会いとなった。デ・ソト氏の著書『資本の謎』は、「何故資本主義が、西側で成功し、他の地域では失敗するのか」を明解に理論づけた本だったからである。

デ・ソト氏は、経済の発展には地元資本の発達が不可欠であるが、ペルーのような発展途上国では「所有権」が十分に確立されてないため地元資本が育たないと主張している。

貧民の家は所有権のはっきりしていない土地に建てられており、会社は明確な法的義務をクリアしたうえで設立されておらず、工場は金融機関や投資家が見ることのできない隠れた場所に建てられている。さらに、不動産に関する権利は書類の形式を十分に整えていないため、所有物件を資本に転化することが難しい。したがって、こうした資産は貧民が互いに信頼し合って住む狭いスラム居住区の外では、借入担保としても、資本参加や投資の対象としても評価されないものとなっている。このように、すべてが法的に不確定な状況に置かれているため、地元の資本が蓄積されることがないという。

私は1990年代から何度かペルーを訪問していたが、資本主義に必要な所有権のあり方を確認できたことはなかった。だが、デ・ソト氏の本を読んでいくうちに、ペルーの社会が手に取るように理解できるようになった。デ・ソト氏の理論の最大の功績は、ペルーのような発展途上国の資本を発展させるためには、表に出てこない資本であるインフォーマル・セクターの経済活動を合法化することが必要であり、その合法化を行う際には、行政側のフォーマルな規範によってのみーから見直すのではなく、インフォーマルな中で形成されてきた既存の規範と行政側のフォーマルな規範の双方の範疇において折り合えるところ、すなわち妥協できる領域にその自発的規範を求め、合法化しようとしたところにあると思う。これはとてもあいまいなゾーンであるが、非合法社会では合法的な決定が無いまま、あたかも合法化されたような取り扱いや処理が行なわれている領域ともいえる。一見合法化されたような、いわば自発的に発生した規範を可能な限り積極的に取り入れて合法化する処理方法を提案したものと言える。具体的な事例としては、1996年に創設されたCOFOPRI（土地の不法居住の承認委員会）というペルー政府の公認機関が行っている非合法住宅地の土地所有権の認証と登録証を交付することによって合法的に土地の所有権を承認する事業が挙げられる。

▲ エルナンド・デ・ソト氏の自宅にて

2002年にはリマ市にある国立サンマルコス大学の経済学部教授であるアキノ先生と知り合う機会を得て、ペルーの不動産所有、特に不法占拠について貴重な助言を頂いた。アキノ先生との出会いは、デ・ソト氏の著作を知る機会を得て、ペルーの貧困の問題に深い関心を寄せていたからこそ実現したのであった。アキノ先生は実際に山岳地帯から降りてきた人々が不法占拠した地域、プエブロス・ホーベネスの一つに私を案内してくれた。そこは私の想像していたものとは異なり、碁盤の目のように区画されており、とても不法占拠したような場所には見えなかった。彼らは侵入する前に国の土地であることを調べた上で、給水車が通れる道幅を残して区画し、各自が占拠するところをあらかじめ決めてから、各自4本の棒と4枚のゴザを用意し、仮設の家を建て、なんと一夜にして1,000人もの人が大挙して不法占拠を行い、街を作ったのだという。

またアキノ先生は同地区内で、満足に食事をとれない人々のためのコメドール・ポプラール（Comedor Popular）という炊き出しのようにしか見えない施設も案内してくれた。政府の支援施設であれば、とても清潔だが、そこで見たのは地域住民が低価格で食事を提供する掘っ建て小屋のようなところで、とても食事ができるような衛生状態ではない。そこに一人の子供が来て食べ物を買って帰った。そこで働いている幹部の人が、「あの子の家は5人家族で、1人前の食事を毎日みんなで分けて食べるのだ。」と教えてくれた。

続いて、不法占拠後20年ほど経過した別のプエブロス・ホーベネスを訪ねた。こちらは水道も電気もあり、小綺麗な住宅街となっており、中心部には立派なショッピングセンターまであった。かつてそこがスラム居住区であったとは思えない空間がそこにあった。デ・ソト氏の提言を政府が推し進めた合法化の過程を垣間見ることができた。

最後にアキノ先生が教鞭を取られているラテンアメリカ最古のサンマルコス大学について紹介しておきたい。かつてリマ大学と呼ばれたサンマルコス大学は、1551年神聖ローマ帝国のカール5世の勅令によって設立された。現在、在籍学生数は40,000名、教員は4,000名以上で、20学部で構成されている総合大学である。

大学内には中央図書館と学部や研究所に属している図書館があるが、中央図書館以外はそれぞれ独立して運営されている。中央図書館には197,586冊の図書、さらに47,763の論文と研究報告書が所蔵されている。4,536の論文と修士論文がデジタル化され、2,949の専門報告書と研究に関する資料が最先端の技術でデジタル化され閲覧できるようになっている。

16世紀から続く由緒あるサンマルコス大学の図書館は今や最先端のデジタル技術により整備されている。そんな近代的で最新式の施設が整った図書館を訪れると、何でも調べられる気がしてくる。

しかしその一方で、私がペルー社会の貧困を研究していた1990年代後半から2000年代前半にプエブロス・ホーベネスで生活している子供たちは、地域内のブルーシートとゴザでできた仮設の小学校で提供される無償の朝食を食べたくてそこに通ったり、教科書が買えずに、2、3名が共同で使ったり、男の子も女の子もお裁縫や編み物を習っていた。それでも子供たちに今一番何がしたいかと質問すると熱い眼差しで「勉強したい」と答えたことを思い出さずにはいられない。貧困問題を抱えるペルーだが、2012年からは、貧困層の中等教育修了予定者及び一定年齢の兵役終了者を対象に、国費奨学金を低利子で貸付けたり給付したりする国費奨学金制度が大学前期課程等で始まったという。プエブロス・ホーベネスの子供たちが勉強に目覚め、大学を目指す日が近い将来訪れるに違いないと確信している。

▲ サンマルコス大学の先生方と（前列左から3番目がアキノ先生）

▲ サンマルコス大学の図書館

ESSAY

世界で唯一の図書館

国際教養学科　髙塚 浩由樹

私は図書館が苦手である。

借りた本は返さなければならない。当たり前のことだ。それを面倒だと感じてしまう自分がそもそも情けない。さらに情けないのは、うっかりして返却期限をやり過ごしてしまうことだ。期限切れの本を図書館のカウンターに差し出すときの、あの自己嫌悪！それを想像するだけで、本を借りることがためらわれる。

それなら、本は借りずに、図書館の中で読めばいい。だが、それも苦手なのだ。ひとりっ子だったせいもあるのだろう、子どもの頃から、まわりに人がいると、じっくり本が読めない。受験生だった頃、自宅に「クーラー」などという贅沢品はなかった。高３の夏休みは暑かった。それでも、図書館には行かなかった。エアコンのきいた図書館に涼を求めることはできただろう。しかし、人がいると集中できない私には、図書館は勉強の空間ではなかった。

そんな私にとって、エクサンプロヴァンス市立メジャーヌ図書館は、極めて例外的な存在だ。静寂な環境を求めるなら、静かな図書館を選択すればいい。本の返却が面倒なら、書店で本を買えばいい。しかし、私が自分の研究のために参照すべき資料は、ほかの図書館で閲覧することも、本屋で購入することもできない。それは、世界で唯一、南仏のこの図書館にしかないものなのだ。2009 年 10 月、私は、選択の余地などなくこの図書館におもむいた。

私の研究対象は、フランス人のノーベル賞作家、アルベール・カミュの『手帖』だ。カミュは、1960 年に自動車事故で亡くなった。『手帖』は、彼の「日記」兼「創作ノート」で、彼の死後に出版された。この『手帖』を、研究者たちは、50 年以上にわたって、作家の人生と芸術の「客観的資料」とみなしてきた。言いかえれば、『手帖』は、突然の事故死によって執筆が中断され、何の手直しも加えられずに後世に遺された、カミュの人生と文学の「痕跡」として読まれてきたのである。

実際は違う。７年前の秋、カミュの長女であるカトリーヌ・カミュ氏の許可を得て、私はメジャーヌ図書館のアルベール・カミュ資料センターで、初めて『手帖』の原稿を見た。私は驚愕した。『手帖』を構成する全９冊のノートのうち、第８・第９ノートを除く７冊に関しては、カミュの生前に作られたタイプ原稿が存在する。私がそこに目にしたのは、おびただしい数の「推敲」の跡だった。出版された『手帖』は、この「推敲」を経たあとのテクストだったのだ。

あの驚愕の発見以来、私は毎年のようにエクサンプロヴァンスにおもむくことになった。「推敲」が行われる前の、『手帖』のオリジナル原稿の復元を目指して、今年もまた私はメジャーヌ図書館に行く。そして、カミュの遺族のご厚意と、司書の方々のご協力に支えられながら、悪筆で知られるカミュの、直筆の文字群の解読に挑戦する。図書館が苦手な私が、選択の余地なく通うことになった、この「世界で唯一の図書館」。その緊張感に満ちた閲覧室こそが、いまの私にとって、かけがえのない幸福の空間なのである。

ESSAY

知のグローバル体験を図書館から

食物栄養学科　安西 なつめ

「図書館」、それは広がり続けるグローバルな知のネットワーク、そのものです。

私は小さな頃から本が好きでした。小学生のある年の夏休みに 50 冊の本を読んで全てに感想文を書き、担任の先生に驚かれたことがあります。その頃は学校の図書館に加え、地域の図書館もよく利用していました。しかし大学生になると、次第に図書館が、好きな物語を読んだり図鑑を眺めるといった楽しいだけの場所ではなくなっていきました。今の私にとって図書館は、研究のために未知なる資料を探し出し、入手する、いわば緊張感に満ちた探険の場と言えます。

では実際にどのようにして資料を探し出し、手に入れることができるのでしょうか。現在、私達は世界中の図書館にある膨大な文献や資料の有無、および書誌情報を、データベースで検索することができます。積み上げられた古い書物の埃を払って一冊一冊整理、分類し、一方で最新の本を購入してその情報を更新し続けて下さる世界中の図書館員さんのおかげです。また私達は各施設間のネットワークにより、相互貸借や文献の複写サービスを利用することで、様々な図書館から、まだほとんど活用されていない書籍や、新進気鋭の研究者の最新の論文も手に入れることができます。私達が実際に赴けば何日もかかるような国で、今まさに誰かが素晴らしい論文を書き、自国で発表しているかもしれません。研究に不可欠な情報収集の頼れる窓口こそ、図書館なのです。

近年では情報の速度が加速し、得られる情報の範囲も驚くほど広がりました。以前、私の先生が、空のスーツケースを携えて海外の図書館をまわり、複写した資料をつめるだけつめて帰国したという話をしてくれました。そこにしか置いていない本、自国のみで発表された論文。これらを得るためには、ちょっとした冒険が必要だったのです。これがほんの 10 ～ 20 年前の話です。今、図書館の利用を通して、学問のスピード、そして方法が大きく変化しているのを実感しています。

更に、最近では図書館の電子化も進んでいます。例えば、学生と教員は電子ジャーナル・データベースの利用によって、大学が契約しているサービスから、一部の雑誌、論文をデジタルデータで読むことができます。図書館の一部の機能は、実際に図書館に赴かなくても活用することができるのです。なかなか図書館に行けない方も、行きづらいと思っている方も、ぜひホームページを活用し、勉学のグローバル化を図書館から体験してみてください。

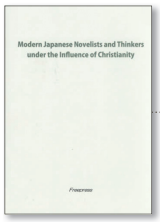
● BOOKS WRITTEN BY FACULTY

本学部教員の刊行物紹介

1945 予定された敗戦 ソ連進攻と冷戦の到来

小代 有希子 著［人文書院］

同書は 2013 年に英語版、2014 年に中国語版が先行出版されたものである。終戦から 71 年がたち、若者は戦争体験者の話しを聞き、わかりました、繰り返しません、と平和を誓う。しかし、ユーラシア大陸と太平洋という広大な地域を舞台にした日本の戦争の正体の何をどう「わかった」と言うのだろう。勝てるはずのないアメリカを相手にした無謀な戦争について反省するという「太平洋戦争史観」の教えだけでは、日本の植民地帝国は崩壊後どうなったのか、日中戦争の結果は日本とアジアの戦後にどのような影響を及ぼしたのか、全く説明できない。「もう一人の勝者」ソ連と、日本はどのような戦後を迎えたかについては、太平洋戦争史観も、日中戦争史観もどちらも語らない。同書は、日米戦争に留まらない<ユーラシア太平洋戦争>を描くことで、これまで語られなかった日本の戦争の<目的>、戦いの<手段>、戦後の<ビジョン>を描こうとしたものだ。大戦末期、日本の指導者・知識人は、敗戦を見込み、ソ連の対日参戦と戦後アジアでの存在感を、中国での内戦の行方を、そして朝鮮支配をめぐる米ソの対立を、予測していた。普通の人々ですら、大戦の進展とともに急速に変化していく国際関係を冷静に観察分析し、何とか敗北した日本が生き残る可能性を考えていた。始めてしまった戦争を「どう終わらせるか」を真剣に考える人々は存在した。日本が戦った戦争の実態の様々な側面を知ることで、当時の日本には生き延びるための英知と洞察力があり、同時に歪曲した正義感と、したたかな卑劣さをも持ち合わせていたことを、この本から実感してもらえたら幸いである。



Modern Japanese Novelists and Thinkers under the Influence of Christianity

髙橋 章 著［フリープレス］

本著は、明治時代以降日本の近代化の中で、日本がどのような近代化の道を歩んだのか、特にキリスト教との関連で、キリスト教が日本人あるいは日本社会にどのような影響を与えたのかを文学や思想の世界で多面的に捉えようとしたものである。日本の精神史は西洋文化と立ち向かう中でさまざまな課題と直面してきた。作家や思想家がどのような背景のもとで作品を書いたのか、またどのような思想を考えたか。明治、大正、昭和の各時代に登場した作家および思想家のキリスト教の影響について述べた。

Part One では文学者として有島武郎、石川啄木、芥川龍之介、太宰治、今官一に言及した。Part Two では思想家をとりあげ、ラファエル・フォン・ケーベル、内村鑑三、武士道とキリスト教、新渡戸稲造とクエーカー、新渡戸稲造の講義と平和主義、吉満義彦について言及した。

本書に紹介されている人々の活躍した分野や時代は多岐にわたっている。江戸、明治、大正、昭和と時代が変わっていく中で各登場人物の活動期間を示した図を巻末に掲載してある。読者は、それぞれ関心を持たれた人物から読んでいただけると幸いである。

日本の近代化の諸問題を考える今回、諸先輩の意見を再考することは、私たちにとって、とても重要なことと思えます。一読を期待いたします。

ドイツの歌舞伎とブレヒト劇

田中 徳一 著［えにし書房］

本書は 20 世紀前半、ドイツ人が異文化の歌舞伎をどのように受容したか、あるいは現代演劇の開拓者、ベルトルト・ブレヒトが歌舞伎とどのように関わりがあるのかを論じました。

まず『寺子屋』です。20 世紀初頭、ドイツ語に翻訳・翻案され、ドイツ各地で上演されました。特にケルン（1907）とベルリン（1908）に絞って上演と反響の様子を詳述、ポーランド語公演（ルヴフ、1904）と比較することで、日本演劇受容の特色を考察しています。

次にブレヒトは歌舞伎から影響を受けたと言われますが、この問題を追究したものは意外に少ないのです。まず筒井徳二郎の歌舞伎（ベルリン公演）をブレヒトが見て、自作『男は男だ』の演出（1931）に刺激を受けた可能性を検討しました。また叙事演劇の傑作『肝っ玉おっ母』のベルリン公演（1949）を取り上げ、旅の表現に使用したブレヒトの回り舞台や、登場人物の身体言語による変身について、歌舞伎の表現技法との比較を試みました。

最後はトク・ベルツ翻案・演出による、ドイツ語歌舞伎『勘平の死』（『仮名手本忠臣蔵』五段目・六段目）のベルリン公演（1938）です。花道を設け、御簾付きの浄瑠璃、化粧・衣装・舞台装置、演技と台詞回しまで、本格歌舞伎を目指したもので、そのドキュメントを記述しました。第二次大戦前の西洋においては稀有の例だったのではないでしょうか。

以上のように、20 世紀前半におけるドイツ人と歌舞伎の関係の諸相を論じてみましたが、そこから未来の演劇への示唆が汲み取れるように思われるのです。

Next教科書シリーズ　哲学

石浜 弘道 編［弘文堂］
平野 明彦 分担執筆

日本語の「哲学」は、かつて沼津でも教鞭を執っていた明治の洋学者、西周によって用いられた言葉であるが、およそ哲学ほど、その内容が一般の読者にとって想像し難い学問も珍しいだろう。このことは、たとえば 20 世紀を代表する二人の哲学者、ラッセルとヤスパースの『哲学入門』を比べただけでも明らかであろう。

本書は、主に初学者や大学生を対象に、「真・善・美・聖」というギリシア以来の哲学の主要領域を網羅すべく、それぞれ各テーマにそって独自に執筆されたものである。各章は次のとおり。第1章「哲学と科学」、第2章「哲学と倫理（道徳）」、第3章「哲学と芸術」、第4章「哲学と宗教」、第5章「哲学と論理」、第6章「現代の哲学」。特に注目すべきは、いずれの章においても、現代の喫緊の課題を取り上げ、哲学がそうした問題にいかに寄与しうるのかに光を当てている点にある。

執筆者は、第6章「現代の哲学」を担当した。まず、近代思想と啓蒙の特徴が述べられ、次にキルケゴール、ニーチェ、ハイデガー、ヤスパース等の近代文明（文化）批判が紹介される。最後に、ドイツ、アメリカ、フランスの代表的思想家を例に挙げて、啓蒙・コミュニケーション・他者をめぐる現代のさまざまな論考が俎上に載せられる。そこで、近代に台頭した理性や合理性や科学技術が、決して万能でないばかりか、現代においてどのような深刻な問題を引き起こしてきたかに、紙面の多くが割かれている。

● 本学部教員の共著など一覧

書名	著者名等	出版社
社会保護政策論	真屋尚生 編著；**円居 総一** 分担執筆	慶応義塾大学出版会
別冊歴史読本　ヒトラーの戦い －世紀の独裁者 その全軌跡－	**吉本 隆昭** 分担執筆	カドカワ
会計検査制度 －会計検査院の役割と仕組み－	会計検査制度研究会 編；**重松博之**，山浦久司 責任編集	中央経済社
アジアにおける地域協力の可能性	青木一能 編；**鄭 勛燮** 分担執筆	芦書房
Arctic Yearbook 2015 : Arctic Governance and Governing	Lassi Heininen 他 著；**大西 富士夫** 分担執筆	Northern Research Forum
Asian Countries and the Arctic Future	Leiv Lunde, Jian Yang, Iselin Stensdal 編；**大西 富士夫** 分担執筆	World Scientific Publishing
並洲国家北极未来	楠剣, 列夫伦德 編；**大西 富士夫** 分担執筆	北京：時事出版社
The Arctic in the World Affairs : A North Pacific Dialogue on International Cooperation in a Chaging Arctic	Oran R.Young, Jong Deog Kim and Yoon Hyung Kim 編；**大西 富士夫** 分担執筆	Korean Maritime Institute & East-West Center
教養としての教育学	藤原政行 編著；**永塚 史孝** 分担執筆	北樹出版
Next 教科書シリーズ　現代教育論	羽田積男，関川悦雄 編；**永塚 史孝** 分担執筆	弘文堂
講談社 実用中日・日中辞典	講談社 編；**井上 桂子** 分担執筆	講談社
映画で読み解く現代アメリカ：オバマの時代	小澤奈美恵，塩谷幸子 編著；**宗形 賢二** 分担執筆	明石書店
現代社会と応用心理学 1　クローズアップ 学校	藤田主一，浮谷秀一 編；**伊坂 裕子** 分担執筆	福村出版
アフリカ潜在力 3　開発と共生のはざまで：国家と市場の変動を生きる	高橋基樹，大山修一 編；**八塚 春名** 分担執筆	京都大学学術出版会
臨床検査データブック 2015-2016	黒川 清 他 編；**高橋 敦彦** 分担執筆	医学書院
目で見る臨床栄養学 UP DATE : 疾病の成り立ちと栄養ケア 第２版	医歯薬出版 編；**高橋 敦彦** 分担執筆	医歯薬出版

※ゴシック太字は本学部教員

所蔵資料紹介

先達免許状
―修験道の歴史の一端を語る古文書―

国際教養学科　濵屋 雅軌

古くから信仰の対象だった富士山は、山伏が修験道の修業を行う山の1つとして重要だった。ここで紹介する古文書は、江戸時代の天保 13（1842）年に村山（現在の静岡県富士宮市村山）の富士山興法寺から発行された、修験道の先達を務めることを許可する免許状である。先達とは先輩を意味するが、とくに修験道では、一般の修行者である道者を先導する存在である。ここに紹介しているような古い字体や文体の文章を読む場合には、それを現代の一般的字体と文体と意味に直して解釈するという手順を踏むのが確実で有効な方法である。そこでまず、和風の漢文体で書かれたこの免許状を現代の一般的字体にすると次のようになる。

「富士山興法寺（朱印）
富士山先立之事、任古例、令免許了。然上者、垢離修業之節、幣束七五三に相用候事。向後、其在所参詣之輩、可令引導者也。

富士山別当
富士山（黒印）　辻坊
頼長（花押）

天保十三寅年六月」

つぎに、これを現代の一般的な字体のひらがな文に直すと、次の通りになる。

「ふじさん　こうほうじ（朱印）
ふじさんせんだってのこと、これいにまかせて、めんきょしおわんぬ。しかるうえは、こりしゅぎょうのせつ、へいそくしちごさんにあいもちいそうろうこと。きょうご、そのざいしょさんけいのともがら、いんどうせしむべきものなり。

ふじさんべっとう
ふじさん（黒印）　つじのぼう
よりなが（花押）

てんぽうじゅうさんねんとらどしろくがつ」

さらに、この本文を現代の文体と意味に直すと、以下のようになる。

「富士山の先達のことであるが、古くからの慣例に従って、それを許可するよう命じておいた。そういうことであるから、富士山の頂上に登って拝礼する前に、穢れた心身を清浄にするため冷水を浴びる水垢離の修業を行うときには、7対5対3の比率で正しく作った幣束を使って聖なる修行場を俗界から分け、その神聖さを保つこと。今後は、郷里から富士山に参詣する仲間を先導させることとなるであろう。」

この先達免許状の差出人は、修験道の聖護院本山派に属する富士山興法寺の別当（長官）を務めた辻坊頼長である。江戸時代には、この寺を拠点とする修験者の中心である村山三坊、すなわち、大鏡坊・池西坊・辻之坊が、同行の修験者である下修験の坊とともに本坊十三人衆を形成して富士山で修業を行い、道者を管理していた。そして、本坊十三人衆の下で富士講（浅間講）の道者を先導していたのが先達であり、その一人がこの文書の受取人であったと考えられる。

この文書では、左上隅に「富士山興法寺」の朱印が捺されており、辻之坊頼長は右下隅で、署名の下に書く判である花押を用いている。この2つのことは、富士山興法寺と村山三坊の格式の高さを伺わせるものといえる。この寺は、修験道の開祖とされる役行者の修法を受継いだ末代上人が、富士山に何百回も登拝して、頂上に大日堂を建て、大棟梁権現と名乗り、村山で即身仏となってその地の守護神になったことが起源であると伝えられている。また、江戸時代には、同じ境内に隣接する村山浅間神社とともに神仏習合を展開しながら、村山を拠点とする富士修験道である村山修験の中心であり続けた。さらに、この文書が書かれた翌年の天保 14（1843）年には、村山浅間神社が、社領の三ヵ村で作られた金幣講の惣世話人で本願主の蒔村屋大吉から常夜燈を寄進されている。天保 13 年 2 月に江戸市民を対象に木魚講と富士講と題目講の禁止令が出されて宗教統制が強まっていた中で、地理的な関係で禁止令の影響がほとんどなかった同神社の活気を窺い知ることができる。そして、富士山興法寺が属していた聖護院（現在の京都市左京区聖護院中町）は明治時代まで、特定寺院の住職である門跡を皇族や摂関家から迎えていた。これらのことを考え合わせるならば、富士山興法寺や村山三坊の格式の根拠を理解することができよう。

富士山興法寺は、このような歴史と伝統をもっていたにもかかわらず、国家神道を創出しようとする明治政府が 1868 年に発布した神仏分離令によって廃止されてしまった。境内の村山浅間神社と大日堂は、分離された。村山三坊は、神職に就いて修験道本山派から離脱した。また、1872 年には修験道禁止令が発布された。こうした時代の変化のなかで村山修験は衰退していき、本坊十三人衆の流れを受け継ぐ数家の法院が、1940 年代まで辛うじて修験道本山派の山伏を続けたが、これも途絶えてしまった。このあと村山修験は、村山浅間神社の祭礼を中心にその命脈を現在まで保つことになる。なお、古くから村山の氏子によって、氏神である末代上人への信仰が現在まで続いている。

このような流れの中で、状況は近年になって大きく変化した。2013 年 6 月 22 日の第 27 回ユネスコ世界遺産総会で、「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」が世界文化遺産に記載され、村山浅間神社（旧富士山興法寺）がその構成資産の1つとなったのである。地元の富士宮市では、2013 年に大日堂から名称変更した富士山興法寺大日堂の保存修理工事が、2014 年度に実施された。さらに、村山修験の宗教活動を振興する動きも高まってきている。

先達免許状

推薦図書紹介 ● RECOMMENDED BOOKS

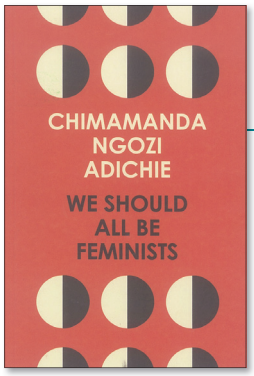
〈オリンピックの遺産〉の社会学 ―長野オリンピックとその後の十年

石坂 友司／松林 秀樹 編著［青弓社］

国際総合政策学科　塩梅 弘之

オリンピックやFIFAワールドカップのような、いわゆる「スポーツ・メガイベント」と言われる大規模なスポーツイベントが、社会にどのような影響を与えているか知りたいと思いませんか。2016年リオデジャネイロオリンピック、2020年東京オリンピックに関する様々な話題がメディアで取り沙汰される今、オリンピック開催の意義がしばしば問い直されています。オリンピックの開催意義とは何でしょうか。それを考える上で重要なのが、オリンピックが社会に残していく「遺産（Legacy）」です。我々がよく報道で耳にするオリンピックの遺産は、例えば、何十兆円の経済効果、開催国・地域のイメージアップ、インフラ整備などです。しかしながら、オリンピックの遺産とはこのようにポジティブなものばかりなのでしょうか。本書は、このようなオリンピックの遺産を1998年に開催された長野オリンピックを研究テーマの中心に据え、正と負の両面から科学的に説明しています。

長野オリンピック開催後に具体的にどのような形の正負の遺産が生まれたのでしょうか。例えば、オリンピック開催により建設されたスポーツ施設は、開催後どの程度活用されているのでしょうか。長野オリンピック開催から10年が経過して、地域住民はオリンピック開催にどのような評価を下しているのでしょうか。「スポーツ・メガイベント」の地域経済活性化という観点から、長野オリンピックを通して誰が経済的恩恵を受け、誰が受けられなかったのでしょうか。一般市民に対する経済的恩恵とは一体どのようなものだったのでしょうか。長野オリンピックを開催するために整えられた高速道路や新幹線などの交通インフラは開催地域にどのような効果・影響を及ぼしたのでしょうか。地方政治の観点から、長野オリンピック開催が県政に対する市民意識にどのように作用したのでしょうか。本書を通してスポーツ・メガイベントの存在意義について考えてみてはどうでしょうか。



We Should All Be Feminists

Chimamanda Ngozi Adichie 著［Fourth Estate Ltd］

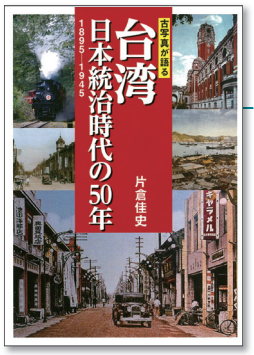
国際総合政策学科　髙橋 力也

当たり前が当たり前でなくなると、人は途端に不安を覚える。手のひらにすっぽりと収まる、僅か52頁の小さな本。読み終えると急に重たく感じられた。性別に付きまとう「らしさ」という固定観念。それは確かに束縛であり不自由だが、一方で縛られたままでいることが案外心地よかったりもする。自由に空を舞う翼はないが、大地という堅実な足場がある。ところが、*We Should All Be Feminists* は、この足場を無慈悲に揺さぶった上で、読み手に対して「今こそ翔べ！」と言うのである。地べたを這うのに慣れた私は、突如与えられた自由に困惑したのだった。

本書は、ナイジェリア出身の作家、チママンダ・ンゴズィ・アディーチェが2012年12月のTED×Eustonで行ったスピーチを活字にしたものである。世界的歌手のビヨンセが、自身の楽曲「***flawless」で、そのスピーチの一部について、大胆にもアディーチェの声をそのままサンプリングしたことで世界の注目を集めた。ファッション誌「VOGUE」の取材で、この曲について聞かれたアディーチェは、「もうその手の質問には飽き飽きね」としつつ、次のように答えている。「とはいえ、13歳の姪が『わたしはフェミニスト』と言い出したのは嬉しいわ。私のスピーチではなく、ビヨンセのおかげでね。」関心を持つきっかけは何でもよい。重要なのは、ジェンダーの問題を身近に感じることなのである。

フェミニストとしてのアディーチェを支えるのは「怒り」である。本書では、身近な出来事を引き合いに、ジェンダーにまつわる不条理に対する彼女の憤りが、時折ユーモアを織り交ぜつつ、軽妙な筆致で語られる。「私は怒っています。皆で怒るべきなのです。長い歴史を振り返っても、物事を好転させてきた原動力は人々の怒りでした。」そんな彼女でも、その怒りを他人と共有するのは一苦労のようだ。ジェンダーの話題は、男女を問わずしばしば人を不快にする。当たり前を否定されると、当たり前と思っていた自分が否定される。多くはそれに抗いたいのだ。

アディーチェのフェミニズムは、そういった人々を排除するのではなく、むしろ巻き込んでいこうという試みだ。その意図は、彼女によるフェミニストの定義にも表れる。「私の中のフェミニストとは、『そうだ、ジェンダーの現状には問題がある、我々はそれを解決しなくてはいけない、改善しなければいけない』と言える人なのです。」世は様々な不正義で溢れている。まずはそれを直視することから始めよう。洋書ではあるが、国内でも安価で入手できる。学生の皆さんには是非手にとってほしい1冊だ。



古写真が語る台湾 日本統治時代の50年 1895－1945

片倉 佳史 著［祥伝社］

国際教養学科　小川 直人

富士山が日本で1番高い山でなかった時期が近現代史上存在している事をご存じだろうか。日清戦争の勝利の結果、台湾が日本に割譲され、その後日本が台湾を統治した50年間のことである。台湾にある当時「新高山」と呼ばれ、現在「玉山」と呼ばれる山の標高は3,952メートルであり、富士山の3,776メートルを上回っていたため、富士山が日本の最高峰ではなくなったのである。新高山の名称はその後、日米開戦の口火を切った真珠湾攻撃の際の暗号電文の中にも使用された（「ニイタカヤマノボレ一二〇八」）。

台湾には日本統治時代に建造された多くの建築物が残存する。その象徴的なものとして台湾総督府本庁舎があり、現在も台湾（中華民国）総統府として使用されている。この本にはそれらの建築物や戦後中国大陸から来た国民党によって取り壊された神社、また街の風景など当時撮影された数多くの写真がその説明とともに掲載されている。よくこれだけ多くの写真を収集したものだと感心する。

「…戦後の台湾では国民党政府による独裁政権時代が続いた…厳しい言論統制下、人々は郷土に向き合う自由を奪われ、自らのルーツを探ることすら憚られた」(p.30) のであるが、「…1990年代に入り、李登輝総統によって進められた民主化によって…日本統治時代を台湾史の一部分としてとらえ、冷静で、かつ客観的な視点から議論し、再評価する動きが定着している」(p.30) と筆者が指摘するように、現在台湾にいる多くの人たちは日本統治時代を含め日本との関係を客観的に認識している。

では、台湾に対する日本側の認識はどうであろう。まだまだ不足しているのではないか。台湾は近代日本が手にした初の「異民族の地」であり、当時の日本人がそこで行ったことを客観的に認識することは、今日の日本人が異文化の人とどのように付き合っていくべきかを考える際にも重要である。グローバルに活躍したいと考える学生には、是非手にとってほしい1冊である。

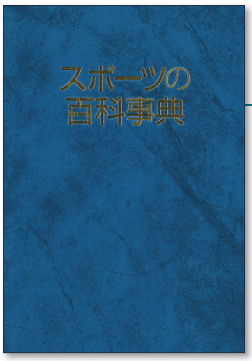
移民の宴 ―日本に移り住んだ外国人の不思議な食生活

高野 秀行 著［講談社］

国際教養学科　八塚 春名

異文化理解を試みるとき、「食」は取り組みやすく、かつ、楽しいテーマである。わたしにとっては、フィールドワークに訪れた先で、現地の人たちがふるまってくれる手料理を、大勢で食べる時間が楽しくてたまらない。しかし、そうした体験は、日本を遠く離れてアフリカや南米やヨーロッパへ行かなければ叶わないというわけでない。本書は、日本に暮らす外国人が、日本でどのように食材を入手し、母国の料理を（ときに日本風にアレンジしながら）楽しんでいるのかを、12 地域の人びとを対象に紹介している。何をどう調理し食べるのか、というだけでなく、食事の作法や食べる場など、食事にまつわる複数の要素が非常に多様でおもしろい。たとえば、群馬県のモスクではムスリムの人たちが大鍋で調理をし、お祈りが終わると全員で食事をする。東京のフランス料理店では、従業員たちがワインとともにフルコースでまかないランチを食べる。東京にある中華学校では、冷めた食事が好まれないことから、お弁当が冷めないよう教室に保温機が設置されている。

本書の舞台は日本であるが、そこには、わたしたちの知らない食事の光景が広がっている。つまり、飛行機に乗らなくても、高い交通費をかけなくても、これほど身近に「異文化」は存在しているということだ。もちろん、すべての事例に登場する人びとの食事は、彼らの日々の暮らしそのもので、わたしたちが観光に訪れる場ではない。それでも、「隣の外国人」が何を食べているのか、そして彼らは母国から遠く離れた土地で食を維持するために、あるいは母国と日本のはざまで自分なりに食を再構築するために、どのような工夫をしているのか、本書を読みながらそうした点に思いを馳せることは、異文化理解への第一歩となるだろう。わたしは本書を読んだ後に、ぜひ、「隣の外国人」を対象にフィールドワークを始めたくなった。それは、なによりも、本書に出てくる食べ物が美味しそうで、そして人びとが食事をする光景がとても魅力的に描かれているからだ。異文化理解は、難しいことでも、遠いことでもなく、とても楽しいことなのだ。



スポーツの百科事典

田口 貞善 編［丸善］

ビジネス教養学科　渕野 辰雄

スポーツは人の行為であり直接的には「体の科学」であるので、現在のスポーツの成り立ちには経済や政治、教育、民族、歴史、芸術、メディアなどの要素を切り離しては、その存在はありません。その魅力は、人文社会科学的見地からも多種多様な分析がなされています。スポーツの成り立ちを総合的に解き明かしているのも、本書の大きな特徴であり、スポーツの歴史から現代的テーマやトピックスまでを盛り込んだ百科事典です。本書では「スポーツを表現する」ということは、人の行為であり、動きでもあると述べており、この原点に立ち返って、「見る」「聞く」「挑む」「読む」「鍛える」「教える」「生きる」「守る」「創る」「考える」「出来る」「勘とコツ」「筋肉の音をはかる」「汗と調子」「筋肉づくり」「楽しむ」と言った動きに関するカテゴリーと「ジェンダー」を設け、16 分野 268 の中項目を収載し、図版を交えています。また、各競技団体、各協会、研究会一覧や野球殿堂入りした方々やオリンピック年表などの付録も充実しています。専門家だけでなく、幅広い層に受け入れられ「家庭に一冊あると楽しくて便利」なスポーツの百科事典として、その奥深さ、面白さを実感してもらえる事典であると思います。

料理のなんでも小事典

日本調理科学会 編［講談社］

食物栄養学科　岩崎 裕子

本書は、料理に関連する様々な疑問に対して、科学的根拠をもとにわかりやすく解説しています。著者らは、調理をする最終目標は、おいしい食べ物を作ることと考え、そのために、調理過程の中で食品素材にどのような変化が起きているのか、また、その変化を基においしい食べ物へと制御するためにはどのようにしたらよいかということを研究しています。100 を超える興味深い質問に対し、各分野の専門家が回答する形でまとめられており、楽しみながら調理のコツやポイントを理解することができるのではないでしょうか。

例えば、「カレーはなぜ翌日に食べるほうがおいしく感じられるのか」、という質問があります。これは、調味料が食材に浸透していく現象において、食材の大きさや調味料ごとに浸透していくスピードが異なること、さらにアミノ酸などの成分が影響することによって、翌日のほうがおいしいと感じられるためです。他にも、「果物を冷やして食べるわけは？」「食前酒を飲むと食事がおいしくなるの？」など味に関する疑問、「涙が出ないようにタマネギを刻むこつは？」「硬い肉でも煮込むと軟らかくなるのはなぜ？」など調理操作に関わる疑問、さらには「スチームオーブンとオーブンの違いは？」「遠赤外線は食品の中まで入るの？」と調理機器に関する疑問など、調理に関わる幅広い知識を得ることができます。日常生活で当たり前のように行う料理ですが、実は科学（= サイエンス）なのです。

食べ物は人にとって生命を維持するための栄養として欠かせないものであることはいうまでもありませんが、それだけでなく、生活の楽しみとなって会話を弾ませ、一緒に食べる人との連帯感を強める種々の楽しみがあります。料理が好き、調理技術を向上させたいという方はもちろん、「食」に興味がある方には雑学としても楽しめる本であると思います。

STUDENT'S VOICE

身近な宝探し

国際総合政策学科　4年　松本 祐美

足元がビショ濡れになるほどの土砂降りの日や、太陽がジリジリと照りつける夏の暑い日は、いつもより正門からの距離が遠く感じられます。ですが、学生証をゲートに通していつものように入り口の扉を開けると、いつもと同じ匂い、同じ空気感が漂う空間。なぜだか知らぬ間に自分の心がリセットされているように感じさせてくれる場所こそが、図書館であると私は思います。

私は、大学に入り多くのことを学びました。高校生までは、知ることができなかった知識や、情報のシャワーを浴びることができるのが大学生なのだと思います。その理由の一つとして、私は本たちとの出会いが大きいと言えます。例えば、講義中に自分の知らない言葉や、事柄に出くわした時、自分自身の解釈を求めてそれに関する本を探すために図書館に向かいます。「わざわざ、そのためだけに?」、「インターネットの方が早いのでは?」と考える学生さんも多いと思います。確かに、インターネットに掲載されている情報の方が新しく、また、現代の私たちにとっては読み慣れているのかもしれません。しかし、本にも、インターネットに勝る良さがたくさんあると私は思います。その一つとして、より客観的に物事を調べることができるということです。というのも、レポートなどに使う資料を探す際に、たった一つのサイト上の文章よりも、数冊の本から得られる情報の方がより濃いものになり、自分の記憶に残りやすいと私は感じています。せっかく調べるのだから、ただレポートの資料を入手するためだけではなく、今後の自分に役立つ、ちょっとした引き出しになった方が、少しお得になった気がしませんか。本１冊を、初めから最後まで読むに越したことはありませんが、私は、必要な箇所だけをかじり読みする方法でも十分、知識を得ることができると思います。

また、本は私たちにたくさんの気づきを与えてくれるものだと私は思います。私たちは、テレビや、スマートフォンでもたくさんの情報を普段から得ることができます。しかし、そういった媒体では出会うことのできない、知識、情報、時には真実までを本は私たちに提供してくれます。皆さんも、ぜひ、新たな発見を図書館で見つけてみてはいかがでしょうか。

国際機関資料室から　INTERNATIONAL DOCUMENTATION CENTER

日・EUフレンドシップウィーク2016
「チャレンジ！EU諸国への留学」開催

EU情報センターを併設している国際機関資料室では、毎年5月9日のヨーロッパ・デーを記念して、日本とEUの交流を目的とするイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

今年は、5月9日(月)～5月31日(火)まで、図書館1階閲覧室及び国際機関資料室にて、「チャレンジ！EU諸国への留学」と題し、EU諸国に留学経験のある学生にパネル作成に協力してもらい、EU諸国への留学を紹介する展示会を開催しました。

フランス、ドイツ、アイルランドに留学した学部生6名それぞれが滞在した町の観光名所や、その地方ならではの文化、習慣、食べ物、スポーツ、祭り、交通機関等についてまとめた現地案内、さらにその学生達がチェコ、ベルギー、オランダ、ハンガリーに旅行した際のレポートも展示。合計7か国の様子が、学生目線で紹介され、とても良い展示になりました。

また、EUが現在最も力を入れている留学プログラム「エラスムス・プラス」についても、紹介しました。日本を含むEU諸国外からも参加でき、特に奨学金が充実しているこのプログラムを詳細に紹介し、現在学部生がすぐに参加できるプログラムはないものの、卒業後にチャレンジできる修士課程や博士課程のコース等も紹介しました。

恒例のクイズでは、展示資料に関連した問題を出題し、正解者には駐日欧州連合代表部から提供されたキティちゃんストラップやUSBネックストラップなどのEUグッズ等の景品が当たるくじ引きも用意しました。

今回は、学生が自らの体験をまとめ、新しい感性でEU7か国を紹介することで、来館者（特に学生）にEUやEU加盟国、EUへの留学に興味を持ってもらえた企画となりました。

図書館ニュース
BIBLIOTHECA
第12号
通巻第157号
発　行　日／2016年10月1日
編集・発行／日本大学国際関係学部
図書委員会
http://www.ir.nihon-u.ac.jp/lib/